

2014夏

調査期間：2014年8月1

日から8月29日



日本学術振興会
研究拠点形成事業
(先端拠点形成型)



北海道大学
アイヌ・先住民研究センター



アルバータ大学
人類学部

2014浜中 2 遺跡調査成果



調査目的と調査主体

浜中2遺跡での人類学・考古学調査は、北方狩猟採集民の環境適応行動を数千年間という長期的スパンで調査研究すると同時に、北方圏での先史人類の島嶼環境における海洋適応行動の解明をめざして実施されています。

また、浜中2遺跡という恵まれた過去からのタイムカプセルを活用して、多角的な視点から過去の自然環境と人類の活動を復元する手法を学ぶ国

BHAPプロジェクト
ホームページ：

<http://bhap.artsrn.ualberta.ca>

プロジェクトNORTH
ホームページ（北方圏
における人類生態史総合
研究拠点）：

<http://nt.cais.hokudai.ac.jp/jp/>

際フィールドスクールを実施しています。

調査主体は、北海道大学とアルバータ大学（カナダ）で、カナダ、イギリス、アメリカ、台湾、日本などから毎年多くの学生、院生、研究者が参加して調査を実施しています。2014年度の参加者は60名となりました。

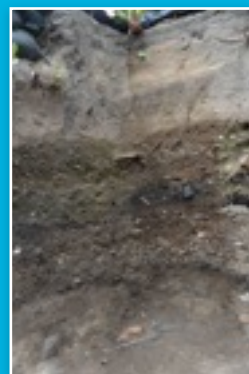
2014年夏の調査成果

2014年の調査によって浜中2遺跡では、深さ3mにおよぶ近世江戸時代のアイヌ文化期からオホーツク文化を経て、縄文時代後期（約3500年前）にさかのぼる礼文島に暮らした人々の長期的な人々の生活痕跡が確認されました。

同一地点で重層的に連続して、なおかつ当時の生活状況が手に取るような良好な状態で残されている遺跡は、全国的に極めて稀です。



調査風景



特筆すべき成果

1) オホーツク文化期中期のヒト形骨製品

オホーツク文化期中期（9世紀ころ）の魚骨層から骨で作られた人物をかたどった製品が見つかりました。オホーツク文化では牙製婦人像が知られていますが、今回みつかった小型の人物像はこれまで知られていません。腰に当たる部分にスカートのような表現が見られる点は、牙製婦人像とも類似しています。



2) シャチの送り場遺構の確認（オホーツク文化期）

オホーツク文化前期（7世紀ころ）の魚骨層から捕獲したシャチの送った儀礼の場が確認されました。見つかったシャチの頭骨は上下逆に配置され、その脇には大きな板石が組み合わされて配置されていました。周囲からは完形の土器も口を地面に伏せた形で置かれていました。オホーツク文化では住居の一角にクマの頭骨を配置する「骨塚」が知られていますが、野外でのクジラ類の儀礼の場の確認は、極めて稀です。



3) 続縄文文化期の骨製ペンダントの発見

続縄文文化（約2000年前）の生活面からは、骨でつくられたペンダントがみつかりました。上半分は欠損していますが、中央部分には、首から下げるための紐を通す穴が開けられており、表面には直線状の線刻が刻まれています。この種の直線を基本とした装飾文様は環オホーツク沿岸や北太平洋沿岸圏に広く見られる文様です。道北圏の続縄文文化の交流圏を考える上で貴重な資料です。



3) オホーツク文化期のその注目される出土品



(左) 骨製針入れ



(右) 海獣(?)形土製品

4) 続縄文文化期の生活面の確認

昨年度に確認された続縄文文化期（約2000年前）の生活面では、火を焚いた炉址の周囲からクジラの骨を加工し、道具を製作した場が確認されました。メノウ製のクサビや石製ナイフ、骨製ヤス、銚頭、骨角器未成品などが骨とともに見つかり、当時の生活がそのままの状況で残されています。



5) 縄文文化後期の生活面の確認

今年度の調査で続縄文文化の生活面の下から縄文文化後期（約3500年前）の生活面が見つかりました。地表面下3mの深さに海獣骨や鳥骨の集中と石器や土器が投棄されています。縄文文化期の調査は、来年2015年夏以降に精査する予定です。

また縄文後期の生活面とは別に、縄文時代終末から続縄文文化期初頭と思われる石組みが見つかり、墓の可能性も含めて2015年度に調査予定です。



■文責：加藤 博文（北海道大学教授）

■日本側調査団連絡先：

北海道大学アイヌ・先住民研究センター 加藤博文研究室内

「北方圏における人類生態史総合研究拠点」事務局

☎ 011-706-4050（加藤研究室）

email h-kato@let.hokudai.ac.jp

■広報窓口：岡田真弓（北海道大学アイヌ・先住民研究センター博士研究員）

m-okada@let.hokudai.ac.jp